



平成17年度第3回研修会報告

平成18年2月3日(金曜日) 千葉市生涯学習センター研修室3を会場に本年度第3回研修会を開催しました。講演の講師は第2回に引き続き、東京大学大学院教育学研究科教授の根本彰氏にお願いし、下記の日程・内容で実施しました。29名の参加を得て有意義な会となりました。

研修会終了後は、生涯学習センター調査・資料室と千葉市中央図書館の施設見学を実施しました。

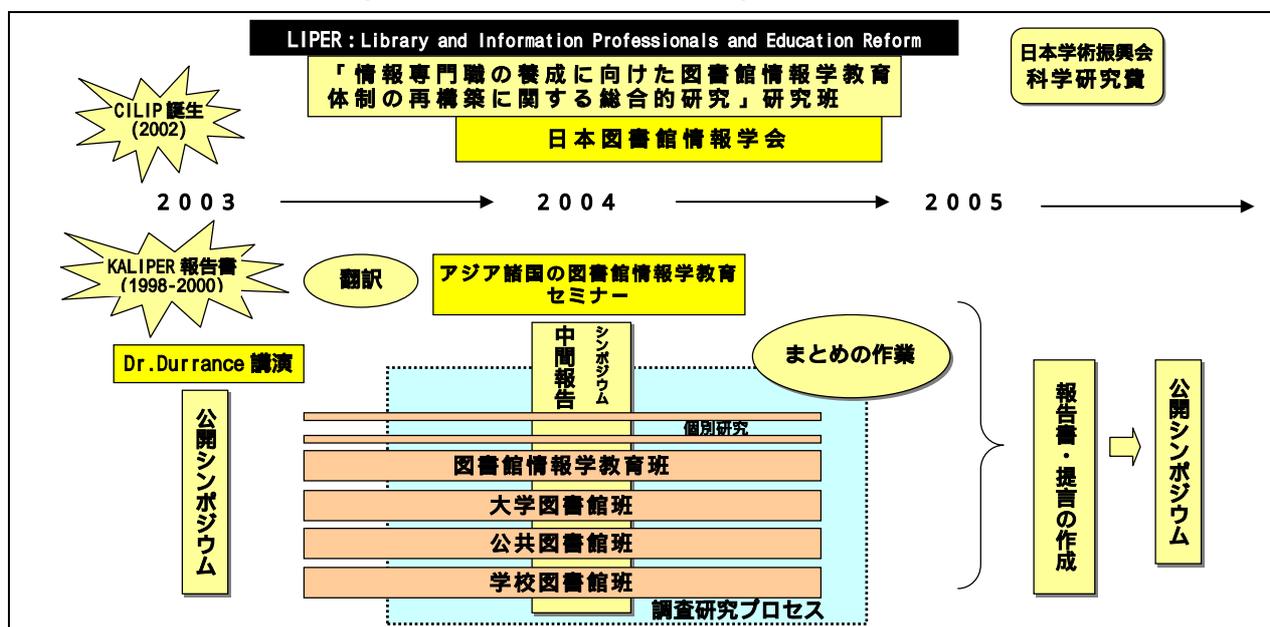
講演会 午後2時00分～3時30分

- ・講師 根本 彰 氏 (東京大学大学院教育学研究科教授)
- ・テーマ 「図書館員は専門職たりうるか
L I P E R 提言をもとにした将来展望」

事例報告 午後3時45分～4時30分

- ・発表者 高橋 理枝 氏 (日本貿易振興機構アジア経済研究所図書館)
- ・テーマ 「レファレンス・データベースの実例」

L I P E R の最終提言 (根本彰氏の講演資料より)



平成17年度 第2回・第3回研修会報告

千葉大学附属図書館 五十嵐 裕二

第2回と第3回の研修会をまとめて報告するのは、根本彰氏（東京大学大学院教育学研究科教授）による講演会が連続して行われたことによります。第2回のテーマは「日本の図書館情報学教育の現在 - L I P E Rは何を明らかにするのか -」、第3回が「図書館は専門職たりうるか - L I P E R提言をもとにした将来展望」のテーマで行われました。両方の講演とも、根本氏が深くかかわっている共同研究プロジェクト「L I P E R」の紹介と情報専門職養成への提言でしたので、L I P E Rについて簡単に説明します。

L I P E R (Library and Information Professionals and Education Reform) は、図書館情報専門職養成の教育体制の再構築ということです。L I P E R研究プロジェクトの目的は、現行の図書館情報学の養成及び研修に関する評価を行うことと、今後の図書館情報学教育を進めるための提言を行うことと説明されています。注)

第2回講演会（以下「前半」という。）は、図書館員養成の歴史、司書養成課程の現状及び館種（公共図書館、大学図書館及び学校図書館）ごとの現状紹介でした。最後にL I P E Rのめざすものが「情報専門職」(Information Scientist と表現したと思う) 養成のための図書館情報学教育の確立であると説明があり前半が終わりました。

第3回講演会（以下「後半」という。）は、L I P E Rの最終提言として、情報専門職を養成する大学院レベルのカリキュラム案の提示及び図書館情報学検定試験の実施の提案という具体性に富む内容でした。以上がL I P E Rの内容及び講演会の概要です。

なお、L I P E Rの報告書が刊行されますので、詳細はそちらをご覧くださいと深く理解できると思います。

私は、前半、後半通してお話を聞く機会を得ました。その中で思ったことは、弁護士などの専門職は個人経営も成り立ちますが、図書館職員は図書館に採用されて初めて専門職として活動の場が与えられるという当然のことでした。つまり高度の専門職養成とその受け皿となる図書館行政の問題は密接に関わっていてその両面を見据えることが必要です。講師も少し触れられましたが、図書館では、業務委託、指定管理者制度、図書館員と一般職員との人事交流など専門職採用を阻害する要因にもなりうる行政面の問題が多く指摘されているのが現状です。講師の提言する情報専門職養成の構想を首肯しても、その職場となる図書館の現状と将来に思いをめぐらすと楽観できないようにも感じました。

最後になり申し訳ないのですが、研修会は根本氏の講演の他に事例発表がありました。第2回研修会においては、千葉明德短期大学図書館の望月春奈氏による「子どもの育ちを軸としたネットワーク作りをめざして」、第3回研修会においては、アジア経済研究所図書館の高橋理枝氏による「レファレンス・データベースの実例」のテーマで報告が行われました。紙幅の関係で紹介できないのが残念ですが、お二方ともに丁寧かつ熱の入った報告でした。

末尾になりましたが、講演者と報告者にお礼を申し上げて報告といたします。

注) 根本彰 “LIPERのめざすもの”(オンライン) 入手先

<<http://wwsoc.nii.ac.jp/jslis/liper/record/nemoto1115.html>>, (参照 2006-2-7)



《千葉市生涯学習センター・千葉市中央図書館》

事例発表「レファレンス・データベースの実例」を聞いて

千葉県立中央図書館 押澤 裕子

今回の研修会では、アジア経済研究所図書館の高橋理枝氏から「レファレンス・データベースの実例」について事例発表がありました。レファレンスデータベース導入の有効性についての大変有意義なお話でしたので、その概要を紹介します。

アジア経済研究所図書館ではACCESSを使用してレファレンスデータベースを自館開発し、平成16年度から図書館内でテスト運用をした後、平成16年8月から研究所全体に公開しているということです。所蔵調査、文献紹介、事項調査という図書館職員が行うレファレンスのほか、研究者が自分の手持ちの情報や研究の成果によって各地域・国の政治経済・社会状況に関し分析、回答する、というようなレファレンスも行っているのです。このデータベースには図書館だけでなく研究者が受け付けたレファレンス記録も入力しているそうです。データは平成15年度分から入力されており、平成17年12月末現在のデータ数は1,580件。利用・蔵書案内を除くすべてのレファレンスについて、図書館職員と研究者が受付後随時入力しています。

レファレンスデータベース導入の効果の一つは、研究者によるレファレンス登録数が増加した、ということです。それまではレファレンスカードに記入していたため、研究者がカードを図書館に持っていくという手間がありました。レファレンスデータベース導入後は各自のパソコンから入力可能になり、作業が簡便化したことによるものと思われます。

また、レファレンスデータの蓄積を利用したウェブサイト上の「良くある質問」コーナーの更新も容易になりました。統計についても質問の対象地域や主題のような統計項目が入力画面の必須項目になっているので、レファレンス内容を地域別、主題別に取りまとめることが容易になり、レファレンス傾向の把握に役立っているそうです。レファレンス

データベースには質問者の名前や電話番号など個人情報が入力されているためパスワードで管理し、個人情報も2ヶ月間残したのち削除しているということです。

このように蓄積したレファレンスデータを自館のレファレンス業務に利用するほか、図書館入力分データの一部を国会図書館レファレンス協同データベースに転送し、一般の利用にも供しています。国会図書館レファレンス協同データベースには平成15年9月の参加募集時から参加しており、現在のアップロード数は474件（うち一般公開データ289件）で、参加館のうち上位の件数だそうです。国会図書館レファレンス協同データベースにアップロードするか否かもデータ入力時の項目となっていますが、月初めに出力する「先月分レファレンスの一覧」を担当課内で回覧する際に内容をチェックし、実際にアップロードするデータを選定するということです。選定したデータは、国会図書館が開発したアプリケーションを使用しアップロードをしています。

アジア経済研究所図書館のレファレンスデータは、このように研究所の内外で活用されていますが、研究者用は入力項目が少ない簡易入力画面にする、業務に必要なものを入力時の必須項目にし省力化を図る等、自館の特性とニーズに合わせたデータベースであることがその要因であると思いました。今回の事例は自館開発のシステムですが、図書館の「財産」であるレファレンスデータの有効活用には、自館開発、既製に関わらず、その館の特性やニーズに合ったシステムを導入することがいかに重要かを改めて実感することができました。



《生涯学習センター調査・資料室》



《中央図書館自動出納書庫》

Network通信 No. 22

2006年3月31日

発行：千葉市図書館情報ネットワーク協議会

事務局：千葉市中央図書館内

〒260-0045 千葉市中央区弁天3-7-7

Tel 043-287-4081 Fax 043-287-4074